

# 道教信仰の原点

加 藤 智 見  
基礎教育課程

Origin of the Faith in Taoism

KATO Chiken

*Division of Liberal Arts and Science*

(Received November 12, 2003 ; Accepted January 18, 2004)

## はじめに

本稿は道教信仰の原点を、宗教学的な立場に立ち、『老子』および『抱朴子』において論究するものである。

道教は中国の民間信仰を組織化し、宗教的に体系化したものである。その体系化の中心になったものが『老子』であった。そういう意味で『老子』そのものが道教であるとは言えないが、道教の中心的な経典とされたことは認めなければならない。事実、五斗米道では『老子』五千文を信者が誦読したという。そこでここでは道教の信仰自体というより、道教信仰の原点となった信仰とはどのようなものであったかという観点から、まず『老子』の信仰観について考えてみたい。

次に、道教信仰の原点を探る場合『老子』とともに『抱朴子』を忘れることはできない。『老子』に比べ直接的に道教の信仰の原点になっているからである。このような観点から、この二書の中に道教信仰の原点を考究してみる。

なお、道教信仰の原点を探るには民間信仰の中にその原点を求めることも当然必要であるが、今回は仮にこの二書に求めるにとどめるものである。またこの論考は宗教学的な角度からのアプローチであるため、いわゆる道教研究の本道からはかなり外れた見方をするであろうことも断っておきたい。

## 1. 『老子』における信仰の原点

『老子』はよく知られているように、中国の春秋戦国時代の思想家老子の著書であると言われ、『老子道德経』ともいう。宇宙の本体を「道」とであると説き、これが絶対的なものであり、無為自然に帰することを説いたもので二巻からなる。

### (1) 「信仰」の使用法

まず注意しなければならない点は、『老子』において「信」という言葉は使われてはいるが、いわゆる信仰の意味で使用されていない点である。『老子』の中では、信はほぼ「信実」の信、つまりまじめで偽りのないこと、正直の意味で使用されている。たとえば「夫れ軽<sup>そ</sup>く諾<sup>だく</sup>するものは必ず信<sup>かなら</sup>寡<sup>まことすくな</sup>し」(夫軽諾必寡信)<sup>1)</sup>、つまり軽々しく引き受けるようなものには必ずといってよいほど信実というものがない、というようにである。いわゆる絶対者や超越者を「信じる」という意味での信ではない。

では宗教的な信仰について究明しようとした場合どうすればよいのか。私見によれば、『老子』においては「道」と「人間」が働き合う関係の中に宗教的信仰の意味が隠されていると思え、これを追究していくといくつかの信仰の要素が見つけれられると考えられる。今はまずこれらの要素を指摘してみよう。

#### 「私欲を少なくする」要素

『老子』第十九に次のような文がある。

「素<sup>そ</sup>を見はし朴<sup>あら</sup>を抱<sup>ほく</sup>き、私<sup>いた</sup>を少<sup>わたくし</sup>くし欲<sup>すくな</sup>を寡<sup>よく</sup>くせよ」  
(見素抱朴、少私寡欲)<sup>2)</sup>

飾り気のない自分の生地をあらわにし、切り出したままの原木つまり手を加えていないそのままの素朴な気持を守って、私欲を少なくせよと言うのだ。こうして私欲を少なくするとき、道はその人に近づき、道に則った生活に近づくことができるという意味である。私欲を少なくしようとする心の中に信仰の要素の一つがある。

#### 「道に従う」要素

第二十一に次のような文がある。

「孔<sup>こう</sup>徳<sup>とく</sup>の容<sup>よう</sup>は、唯<sup>ただ</sup>道<sup>みち</sup>に是<sup>これ</sup>れ従<sup>したが</sup>ふ」(孔徳之容、唯道是從)<sup>3)</sup>。

大きな徳をそなえた人は、ただ道にだけ従っているという。道は人間から見れば、おぼろげで捉えどころがな

いが、心を虚しくしてこれを見つめていると、その奥深くに精気のようなものがありその中に道の働きがあるというのである。この道の働きに従わなければならないというのであり、ここにも道に対する信仰の要素が見出される。

#### 「謙譲な」要素

第八に次のような文がある。

「上善は水の若し。水善く万物を利して争はず。衆人の悪む所に処る。故に道に幾し」(上善若水。水善利万物而不争。処衆人之所惡。故幾於道)<sup>4)</sup>

その意味は、最上の善は水のようなもの。水は万物に恵みをもたらすが決して万物と争わず、だれもがいやがる低湿の土地に自分を置く。道との関係の中にいる人は、水のように謙譲でなければならないというのだ。道に対して謙譲であることも、したがって信仰の一要素になる。

#### 「心を虚しくする」要素

第十六に次のような文がある。

「虚を致すこと極まり、静を守ること篤ければ、万物並び作るも、吾以て其の復るを觀る」(致虚極、守静篤、万物並作、吾以觀其復)<sup>5)</sup>

心を虚しくし尽くして静寂を守れば、万物がさまざまに生起してもやがてはすべてその根源である道に帰っていくのが見える、ということである。「虚」と「静」は「道」の属性であり、これを心にもてば、すべてが宇宙の根本的な本体である道へと帰っていくのが見えるのであり、道と自分の間で心を虚しくすることは道に対する信仰の一要素となる。

#### 「道と一体になる」要素

同じく十六に次のような文がある。

「命に復るを常と曰ひ、常を知るを明と曰ふ。常を知らずして妾に作せば凶なり。常を知れば容、容なれば乃ち公、公なれば乃ち王、王なれば乃ち天、天なれば乃ち道、道なれば乃ち久しく、身を没するまで殆からず」(復命曰常、知常曰明。不知常妄作凶。知常容、容乃公、公乃王、王乃天、天乃道、道乃久、没身不殆)<sup>6)</sup>

この文の意味は、万物がその根源である命に帰っていくことを恒常不変の真理といい、この真理を知ることが聡明であるということである。このことを知らないで軽挙妄動すれば不吉を招くが、このことを知れば寛容になり、寛容になれば、公平になり、公平になれば王者の徳をそなえることになる。王者になれば天理にかなった行為ができるようになり、これができれば道と一体になり、道と一体になれば長寿を保つことができ、生涯安穩無事に暮らすことができる、ということである。道と一体になることができるという考え方は、信仰に希望を与える重要な要素となる。

#### 「養われている」要素

第二十に次のような文がある。

「衆人皆以す有り、而るに我独り頑として鄙なるに似たり。我は独り人に異なりて、母に食はるるを貴ぶ」(衆人皆有以、而我独頑似鄙。我独異於人、而貴食母)<sup>7)</sup>

その意味は、人々は皆せかせかと何かをしているが、私だけは頑固でば一とした田舎者に似ている。しかし実は私だけが、自分の力に頼って何かをしているような人とはちがって、天地の母つまり道に養われていることを大切にしている人間である、という意味。自分の能力を頼んであくせくしている人間に対し、自然の懷に抱かれ身をまかせ、道に養われるところに道と人間の理想的な関係を見出している。ここには道という一見非人格的なものに対する人格的な信仰の要素も見られる。

#### 「永遠の生命を与えられる」要素

第三十三には次のような文がある。

「其の所を失はざる者は久しく、死して亡びざる者は寿なり」(不失其所者久、死而不亡者寿)<sup>8)</sup>

その意味は、自分がいるべき所にいてそれをまちがえない者は、久しく安らかであり、こうして道と一体になり永遠の生命を与えられた人は、肉体が減んでも真の生命は減びず、本当の長寿を得た者であるというのだ。やがて長寿が強く求められるようになる道教の原点はこのように思いの中にあるが、道と自分の間にこうして永遠の生命が与えられるという考え方は信仰の魅力ある要素となったはずだ。

#### 「力を与えられ、生成される」要素

第四十一には次のような文がある。

「道隠れて名無し。夫れ唯道のみ善く貸し且つ成す」(道隱無名。夫唯道善貸且成)<sup>9)</sup>

その意味は、道は人間の目の前には姿をあらわさず、名前もつけられない存在であるが、ただこの道こそが善く万物に力を与え、生成しているのだということ。道と人間の間には、人間からは見えないが、道がすべてのものに力を与え、すべてのものを生じ、成長させ、育て、熟させている。

しかし第五十一に「長じて宰せず。是を玄德と謂ふ」(長而不宰、是謂玄德)<sup>10)</sup>と述べられているように、道は成長させても決して支配しようとししない。これが玄妙な道の恵みであるというのだ。つまり平生は人の前には隠れているが、ちゃんとすべてに力を与え、恵みを注いでいる。しかし支配などはしない。恵みを与えるが、支配もするといった関係ではない。恵みを与えられながら支配はされないというところに道の偉大さを感じる信仰の要素を見なければならぬだろう。

## 「願いに応え、守る」要素

第七十三に次のような文がある。

「天の道は争はずして善く勝ち、言はずして善く応じ、召さずして自<sup>おのづか</sup>ら来<sup>きた</sup>り、縉然<sup>せんぜん</sup>として善く謀<sup>はか</sup>る。天網<sup>てんまう</sup>恢恢<sup>くわい</sup>、疎<sup>そ</sup>にして失はず」(天之道不争而善勝、不言而善応、不召而自来、縉然而善謀。天網恢恢、疏而不失)<sup>11)</sup>

よく知られた文であるが、その意味は、天の道は争わずしてよく何ものにも勝り、何も言わないでもよくすべてのものの願いに応え、招かないのに道に従う者のところにはおのずから来て守り、ゆったりしているが実はよく謀りうまく事をはこぶ。天の網は目があらそうであっても決してもらすことがない、という意味である。道は人の願いに応じ、守ってくれているという思いの中に、道に対する信仰の要素があるといえる。

ではこのような信仰の要素について、老子の人間観、神(道)観、わざの見方などを考え、さらに明確にしていきたい。

### (2) 人間観

老子における人間観は基本的には性善説的である。第四十九に次のような表現がある。

「善なる者は吾<sup>われ</sup>之<sup>これ</sup>を善とし、不善なる者も吾亦<sup>また</sup>之<sup>これ</sup>を善とせん。徳善<sup>とくぜん</sup>なればなり。信<sup>しん</sup>なる者は吾之<sup>われこれ</sup>を信とし、不信なる者も吾亦<sup>また</sup>信とせん。徳信<sup>とくしん</sup>なればなり」(善者吾善之、不善者吾亦善之。徳善。信者吾信之、不信者吾亦信之。徳信)<sup>12)</sup>

その意味は、善人と言われる人を私は善人として受け入れる。しかし不善な人も私は善人として受け入れよう。人の心の中にそなわっているものが善であるからだ。また信ある人を私は信ある人と受け入れ、信のない人も私は信ある人として受け入れよう。人間の心の中にそなわっているものは本来信であるからだ、というものである。善人も善人でない者も本来は心に善をもち、信実のある者も信実のない者も本来は心の中に信実をもつという。道から生まれた天地、天地から生まれた人の中には本来道がゆきわたり、したがって善が宿り、信実なものが存在していると考えられているのだ。分別くさい小人物は善人と不善の人、信実な人間と信実でない人を区別しようとする。しかし道を知り、道に身をゆだねる者はそのような区別はしない。ここに道に対する信仰の姿の一面と信仰の要素の一つが見られる。

さてこのように道を知り、道を信じ得た人を老子は「聖人」とみなす。

「聖人<sup>せいじん</sup>の天下に在るや、怵<sup>ちゅう</sup>怵<sup>ちゅう</sup>として天下の為に其の心を渾す。百<sup>ひゃく</sup>姓<sup>せい</sup>は皆其の耳目を注げども、聖人は皆之を孩<sup>がい</sup>にす」(聖人在天下、怵怵為天下渾其心。百姓皆注其耳目、聖人皆孩之)<sup>13)</sup>

聖人が天下に対して取る態度は、不善、不信の者を否定してしまうことを恐れ、自分の心を混沌とした状態にしておこうとする。万民が皆耳目を注いで区別しようとしても聖人は自分の耳目を幼児のようにして無知無欲となり、分別心をもたないようにするという。道に身をゆだね、おのずから幼児のようになり切ろうとするのである。ここに人間の分別を離れた自然な信仰を説く老子の信仰観と人間観が見つかる。

### (3) 神(道)観

先に指摘したように、老子においては信仰対象は道であったと考えるのが妥当であろう。そこで、あらためて道の意味をたずねてみる。

第三十八に次のように述べられている。

「夫<sup>そ</sup>れ礼<sup>れい</sup>は忠信<sup>ちゅうしん</sup>の薄<sup>はく</sup>にして乱<sup>らん</sup>の首<sup>はじめ</sup>なり。前識<sup>ぜんしき</sup>者は道<sup>みち</sup>の華<sup>か</sup>にして愚<sup>ぐ</sup>の始<sup>はじめ</sup>なり。是<sup>こ</sup>を以て大丈夫<sup>だいぢやうふ</sup>は、其の厚<sup>こう</sup>きに処<sup>を</sup>りて、其の薄<sup>うす</sup>きに居<sup>を</sup>らず。其の実<sup>じつ</sup>に処<sup>を</sup>りて、其の華<sup>くわ</sup>に居<sup>を</sup>らず。故に彼<sup>を</sup>を去<sup>を</sup>りて此<sup>を</sup>を取る」(夫礼者忠信之薄而乱之首。前識者道之華而愚之始。是以大丈夫、処其厚、不居其薄。処其实、不居其華。故去彼取此)<sup>14)</sup>

礼などというものは真心から信じ合う信頼関係が薄くなったときに出現するものであって、世の中が乱れる始まりとなるものだ。人より前に識るといわれる知者などという者は「道」の咲かせるあだ花、つまり末梢的なものであり、愚の始めとなるものである。それゆえ立派な人間は真心から信じ合う忠信にいたのであって、薄い礼にはいない。誠実な道に身を置くのであって、あだ花である知には身を置かないのだ。だから礼や知を捨てこの道を取る、というのである。つまり老子によれば、「道」というものがもっとも大切なものであり、これが信仰の対象となる。これに対して「礼」とか「知」は人間の分別によるものであって信仰対象とはならない。

第二十五には次のような記述がある。

「物有り混成<sup>こんせい</sup>し、天地<sup>てんち</sup>に先だつて生<sup>せい</sup>ず。寂<sup>せき</sup>たり寥<sup>れう</sup>たり、独立<sup>りっどく</sup>して改<sup>か</sup>まらず、周<sup>しゅう</sup>行<sup>こう</sup>して始<sup>おこ</sup>らず、以て天下の母と為<sup>な</sup>す可<sup>べ</sup>し。吾<sup>われ</sup>、其の名を知らず。之に字<sup>あざ</sup>して道と曰<sup>い</sup>ひ、強<sup>し</sup>ひて之<sup>を</sup>が名を為<sup>な</sup>して大と曰<sup>い</sup>ふ」(有物混成、先天地生。寂兮寥兮、独立而不改、周行而不殆、可以為天下母。吾不知其名。字之曰道、強為之名曰大)<sup>15)</sup>

はじめに混沌とした一つのものであり、天地が生まれる以前から存在していた。それはひっそりとして音もなくぼんやりとして形もない存在で、何ものにも依存せず不変のものであった。あまねく万物にゆきわたり妨げられるということがない。この世界を生み出した母とも言うべきものであるが、私はその名さえ知らない。だから仮に呼び名をつけて道といい、どうしても名をつけるとしたら大とでもいっておこう、という意味である。



そして同所に老子は次のようにいう。

「人は地に<sup>ちのつと</sup>法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に<sup>しぜん</sup>法る」(人法地、地法天、天法道、道法自然)<sup>16)</sup>

人は大地のあり方にのっとり、その大地は天のあり方にのっとり、天は道のあり方にのっとり、その道はあるがままの自然なあり方にのっとっていくのだ、という意味である。ということは、「道にのっとり、自然にのっとり、道、自然に身をゆだねる」ことに老子の「信仰」の意味があり、そのことはまた万物を生み出した母に身をゆだねることとも同じ意味となつて、やがて具体的な信仰となっていく。

では次にこのような信仰によって生きる場合、人間の働き、行為すなわちわざはどのようなものになるかを見てみたい。

#### (4) 信仰とわざ

第五に次のような表現がある。

「天地不仁、万物を以て<sup>ふじん</sup>芻狗と為す。聖人不仁、百姓を以て<sup>ひゃくせい</sup>芻狗と為す」(天地不仁、以万物為芻狗。聖人不仁、以百姓為芻狗)<sup>17)</sup>

天地には仁というような人間的な愛情などはない。天地は、万物を祭りに使う藁で作った犬のように扱う。この犬は祭りのときには神聖なものとして扱われるが、祭りが終われば不要なものとして捨てられ、燃やされてしまう。使命を果たせば元の世界にもどされるということだ。道を体した聖人も同じであって、仁などという人間レベルの愛情ではなく、もっと大きく深い道の働きに虚心な気持ちで従わなければならないというのである。それだからこそ、真に偉大な働きができる、というのだ。続いていう。

「天地の間、其れ猶ほ<sup>かん</sup>橐籥のごときか。虚にして<sup>な</sup>屈き<sup>たくやく</sup>ず、動いて愈々<sup>いよいよ</sup>出づ。多言は数々<sup>しばしば</sup>窮す。中<sup>しゅう</sup>を守るに如かず」(天地之間、其猶橐籥乎。虚而不屈、動而愈出。多言数窮。不如守中)<sup>18)</sup>

天と地の間はふいごのようなものだ、空虚ではあるがその働きは無限であって動けば動くほど万物が生み出される。口数が多ければ行きづまる、内面の虚心を保ち守ることが必要だ、というのである。

道の働きを信じ、おのれの心を虚心にするところに老子の「わざ」の原点がある。すなわち人間的な愛情などによって行動をおこすのではなく、先の文にもあったように大きく深い道の働きの前に虚心になったとき、おのずと道と一体になったわざが生まれてくるのである。ここに老子における信仰とわざの原点が見つかる。

以上、『老子』の信仰についてさまざまな角度から検討してみたが、その信仰の特質については次の『抱朴子』の信仰の検討後、道教の信仰の特質として述べてみる。

## 2. 『抱朴子』における信仰の原点

『抱朴子』は、晋の葛洪(283-343頃)の著書で317年に成ったとされる。内外篇八卷七十二篇のうち、内篇は神仙の法が説かれ、外篇は道德・政治について論じられている。今は内篇を取り上げ、「信仰」について考えてみる。

### (1) 「信仰」の使用法

老子にくらべると、抱朴子の「信」の意味はかなり宗教的な信仰の意味をおびてくる。いくつかの例をあげながら、見てみよう。

#### 「俗情を捨てて純一になる」要素

『抱朴子』勤求篇に次のような文がある。「そのこれを信ずる者も、復た俗情の<sup>あらいつく</sup>蕩尽せざるを患ふ。而も専ら養生を以つて意となすこと能はずして、世務を<sup>うれ</sup>管の余暇にしてこれをなす。或ひはこれをなす者あるも、恒に<sup>つね</sup>晩くして多く成らざるを病む所以なり」(其信之者、復患於俗情之不蕩盡。而不能専以養生為意、而管世務之余暇而為之。所以或有為之者。恒病晩而多不成也)<sup>19)</sup>

その意味は、仙道の道を信じて、俗情が残っているようではいけない、真剣に一筋に求めなければならない。世俗の仕事を余暇に仙道を修めようとしても成功するはずはないという意味。信仰の対象が明確に仙道すなわち神仙の道となり、信仰も俗情を捨てて純一なものとななければならないと説かれる。ここに信仰の要素の一つがある。

#### 「熱狂的ではない」要素

道意篇に次のような文がある。

「而も復たこれ、その愚妻頑子の篤く信ずる所にして」(而復是其愚妻頑子之所篤信)<sup>20)</sup>

葛洪は太平道や五斗米道(いずれも道教の源流になるが呪術的な傾向が強かった)の信仰と自分の信仰とが混同されることを嫌った。上の文は、地方の長官たちの愚かな妻子がそれらを熱狂的に信じていることを指し、非難していったものである。一面で科学的なものを重んじた葛洪は熱狂的な信仰、狂信を排した。ここにも信仰の一要素があるといえる。

#### 「誠の心をもつ」要素

勤求篇に次のような文がある。

「亦人あり、皮膚のみ好喜すとも、道を信ずるの誠は、心神に根ざさず。索め欲する所あるも、<sup>もと</sup>陽りて<sup>いつわ</sup>曲恭をなし、累日の間に怠慢すでに<sup>あらわ</sup>出る」(亦有人。皮膚好喜、而信道之誠不根心神。有所索欲、陽為曲恭、累日之間、怠慢已出)<sup>21)</sup>

この文の意味は、うわべのみ好んでいても、道を信じる誠が心根に根ざしていず、いつわりの礼をなしている

だけなので、怠慢の情が出てきてしまう人がいるというもの。誠の心をもって道を信じなければならないというのであり、これが信仰の一要素となると同時に、老子の道がはっきりと宗教的な信仰の対象になってきている点に留意したい。くわしくは後に触れる。

### 「宿命に支配される」要素

塞難篇に次のような注目すべき文がある。「命、死星に属すれば、則ちその人亦仙道を信ぜず。仙道を信ぜざれば、則ち亦自づからその事を修めざるなり」(命属死星、則其人亦不信仙道。不信仙道、則亦不自修其事也)<sup>22)</sup>

仙道には、親から生まれるとき、その日の星座との関係によってその人のすべての運命が決まるという宿命の思想がある。その宿命が生に属する場合は仙道を好み信じ、求めるものが得られるという。逆に死の星に属すれば、仙道を信じないし、信じなければ仙道を修めようとはしないし、できないというのである。信仰という行為が星座との関係からとらえられていることに留意しておきたい。民間信仰の根強い影響であろう。

### 「いつわりの神信仰や祈禱を排する」要素

道意篇に次のような文がある。

「余親しく、識る所の者数人を見るに、<sup>ついに</sup>神明を奉ぜず、一生祈祭せざるに、身は<sup>ながきとし</sup>遐年を享け、名位魏魏として、子孫蕃昌し、かつ富みかつ貴し」(余親見所識者数人、了不奉神明、一生不祈祭、身享遐年、名位魏魏、子孫蕃昌、且富且貴也)<sup>23)</sup>

その意味は、私が親しく知っている数人の知人は神明(神)を信じないだけでなく一生の間祈禱もしなかったが、長生きし名声も位も高く子孫は繁盛し豊かであったというものである。葛洪は一面で薬学や医学などを修めた科学者でもあり、合理的な側面もあった。このため根拠のないご都合主義的な邪神信仰や祈禱は迷信として斥けた。しかし他面で、真剣に正しい神たとえば太乙元君(天を主宰する神、老子の師、黄帝も仕えた)や老子に祈ることは奨励している。理性に合わない迷信は斥け、理性に合う次元の高い信仰は積極的に認め、奨励した。そこに宗教と科学の一致を見出そうとしたのである。

### 「人が神となった天神を祭る」要素

金丹篇に次のような文がある。

「鄭君言ふ、爾<sup>しか</sup>所以は、この大薬を合はすには、皆まさに祭るべし。祭れば則ち<sup>たいいつげんくん</sup>太乙元君、<sup>ろうくん</sup>老君、<sup>げんじょ</sup>玄女、皆来りて薬を作る者を鑑省す」(鄭君言、所以爾者、合此大薬皆当祭。祭則太乙元君、老君、玄女、皆来鑑省作業者)<sup>24)</sup>

この文の意味は、葛洪の師の鄭君がいうように大薬(金液九丹)を調合するには人が神となった天神を祭ら

ねばならない。天神を祭れば、太乙元君、老君(老子のこと)、玄女(神女)が皆天からやって来て薬を作る人々を見守ってくれるというのである。薬を作るには齋戒沐浴し、一心に打ち込まねばならないが、打ち込めば天神が来て導き、不死の薬を作り得るというのだ。創造神ではなく、努力して人間から天神となった神々が人々を見守り、導いてくれる、そのような神を信じる信仰の要素にも注目すべきである。

### 「老君の姿を諦念する」要素

雜應篇に次のような文がある。

「ただ諦<sup>あきら</sup>らかに老君の真形を念ひ、老君の真形見はるれば、則ち起<sup>た</sup>ちて再拜せよ」(但諦念老君真形。老君真形見。則起再拜也)<sup>25)</sup>

その意味は、ひたすら老子の姿を心の中に思い、その姿が見えてきたら、すみやかに立ち上がって再拝しなければならないというものである。老君すなわち老子が大神仙で道教の祖とされ、その姿が念じられるべきであるということは、『老子』の思想が宗教化されているということでもある。しかし単に神格化されているのではなく、老子も学んで神仙になった人であって、道を得た最も優れた人として信じられていることに留意したい。超越者として信じられる信仰ではなく、いわば人間の優れた先輩として諦念され信じられる信仰の要素である点に留意したい。

### 「老君の姿を見れば、不老長寿となり、すべてを知る能力が与えられる」要素

同じく雜應篇に次のような文がある。

「老君を見れば則ち年命延長して、心は日月の如く、事として知られざるなきなり」(見老君則年命延長、心如日月、無事不知也)<sup>26)</sup>

老君の姿を見れば不老長寿となり、心は日月のように明らかになって、知らないことがなくなるということ。すなわちすべてのことを知る能力が与えられるということだ。このことは、仏教でいう仏を念じればその姿が見え、心も清らかになり、何事についても真の認識が可能になるということと共通するであろう。この点は多くの宗教に共通することでもあるが、それが不老長寿と結びついた点に道教の特徴がある。この現実的な信仰の要素は人々の気持を強くとらえたことであろう。

### 「一を貴ぶ」要素

地真篇に次のような文がある。

「道は一より起こる。その貴きこと偶<sup>たぐい</sup>なし。各々一処に居りて、以つて天地人に象る。故に三一と曰ふ」(道起於一、其貴無偶。各居一処、以象天地人。故曰三一也)<sup>27)</sup>

その意味は、道は一から起こる、だから一は道より貴

く、その貴いことは類がない。この一が三つに別れ天地人の姿を現わし、それゆえ三一であるというもの。老子においては道と一は同じものであったが、葛洪は道より一の方が貴いものであるとし、一をさらに宗教的な存在として、老子とちがった点を打ち出す。

### 「道を得て天神や人神にならねばならない」要素

金丹篇に次のような文がある。

「その経に曰く、上士、道を得れば昇りて天官となり、中士、道を得れば崑崙に棲集し、下士、道を得れば世間に長生す」（其経曰、上士得道、昇為天官、中士得道、棲集崑崙、下士得道、長生世間）<sup>28)</sup>

その意味は、太上元君の著作であるとされる『太清観天経』には、周代には士の身分を三段階に分けたが、最高の人間（上士）は道を体得すれば天に昇って天官（天神・天仙）になり、中級の人間（中士）は崑崙に住み人神（地仙）となり、下級の人間（下士）は道を体得すれば世間にいて長生きするとされている、というもの。葛洪によれば、人間が神になる。人神であり天神である。地上に住む者が人神、天上に昇る者が天神、これを地仙、天仙ともいうが、こうして人が神になるという発想に改めて留意しておきたいし、この点は人間が仏になるべきであるとする仏教とも類似する。

では神になり得るとされる人間は、『抱朴子』ではどのように考えられているのか。

### (2) 人間観

黄白篇には次のような表現がある。

「その法を有する者は、則ち或ひは飢寒にして、以つてこれを合す無し。而も富貴の者は、復たその法を知らざるなり。就令これを知るも、亦一も信ずる者なし。仮令頗やこれを信ずるも、亦已に自づから金銀多ければ、豈に肯へて見財を費して以つてその薬物を市はんや」（有其法者、則或飢寒、無以合之。而富貴者、復不知其法也。就令知之、亦無一信者。仮令頗信之、亦已自多金銀、豈肯費見財、以市其藥物）<sup>29)</sup>

金銀を作る方法を知っている者（道士）は、大体において貧しいので、材料が手に入らず作ることができない。財力のある者は、その方法を知っていないばかりでなく、知っていても信じようとししない。たとえ少しは信じていても、もうすでに金銀をもっているのだから、これ以上費用をかけ精進潔斎してまで作ろうとはしない、というのである。

老子においては、すでに述べたように人間は性善的にとらえられていた。しかし抱朴子になると、このように墮落した者の姿に焦点が当てられるようになる。老子の楽天的な人間観から次第に悲観的な人間観への移行が見られる。と同時に悲観的な人間観は、観念的な道への信

仰と並んで、具体的で現実的、しかも人格的な天神等への信仰を濃厚にする傾向を生んでいる。いわゆる老荘思想から道教への宗教的移行をうながすことになっているのではないかと思える。したがって当然神観にも変化がおこっているはずである。

### (3) 神観

勤求篇には次のように述べられている。

「苟しくも心に信ぜざる所は、赤松・王喬をして、言ひてその耳を提さげしむと雖も、亦まさに同じく以つて妖訛となすべし」（苟心所不信雖令赤松・王喬言提其耳、亦當同以為妖訛）<sup>30)</sup>

心に仙道を信じないものは、有名な赤松とか王喬といったにしえの大仙人が現われ耳をひっさげてもその尊さがわからず、単に妖怪や化け物のように考えてしまうというのだ。信じるということが大きくクローズアップされ、神に当たるものも道といった観念的なものから赤松や王喬といった具体的な存在に変化している。

また金丹篇には次のような表現がある。

「元君は天神仙の人なり。能く陰陽を調和し、鬼神風雨を役使し、九竜、十二白虎に驂駕し、天下の衆仙皆隸ふ。猶自づから言ふ「亦本と、道を学び丹を服するの致す所なり、自然に非ざるなり」と。況んや凡人をや」（元君者大神仙之人也。能調和陰陽、役使鬼神風雨、驂駕九龍十二白虎、天下衆仙皆隸焉。猶自言、亦本学道服丹之所致也、非自然也。況凡人乎）<sup>31)</sup>

元君（太乙元君）は天神であり、元来人間であった。陰陽を調和し、鬼神や風雨を支配し、九匹の竜、東西南北のうち西方を守る十二匹の白虎に乗り、天下の衆仙は皆従った。この元君はみずから「もともと私も道を学び、丹薬をのんでこの境地に至った。何もしないでこうなったのではない」という。まして凡人ならば努力しなければならない、という意味である。

この元君は老子の師であり、黄帝も仕えた存在であったが、留意すべきはもともと人間であり、道を学び努力して天神になった、という点である。いわゆるキリスト教やイスラム教の創造神とはまったく異なる。道を学び、信じ、元君を尊敬するところに抱朴子の信仰の意味と信仰対象の明確化が見られる。陰陽を調和させたり鬼神や風雨を支配するといっても宇宙を支配するのではなく、宇宙の原理すなわち道と一体になり、宇宙の原理が正しく運行されるよう助力するというのだ。創造神でも主宰神でもなく、宇宙と一体となった努力者たる人間神である。ここには老子的な宇宙観がその基底に存し、道を信じ、学び、修行し、かつ努力して天神となった人間を信じる信仰の特色が見られる。

では次に、このような信仰をもち、どう行動すべきか



の問題を考えてみる。

#### (4) 信仰とわざ

勤求篇には次のような記述が見られる。

「それ長生は、制として大薬に在るのみ。祠醮の得る所に非ざるなり。昔、秦漢二代、大いに祈祷を興す。祭る所の太乙・五神・陳宝・八神の属に、動もすれば牛羊穀帛を用ひ、錢億万を費せしも、了に益する所なし。況んや匹夫において、徳はこれ備はらず、体はこれ養はれず、而も三牲酒肴を以つて鬼神に祝願し、以つて延年を索めんと欲す。惑へるも亦甚しいかな」(夫長生制在大薬耳。非祠醮之所得也。昔秦漢二代、大興祈祷。所祭太乙・五神・陳宝・八神之属、動用牛羊穀帛、錢費億万、了無所益。況於匹夫、徳之不備、体之不養、而欲以三牲酒肴、祝願鬼神、以索延年。惑亦甚矣)<sup>32)</sup>

この内容は次のようなものである。そもそも不老長生の秘訣は偉大な薬にしかない。単なる祭祀や祈祷ではだめなのだ。昔、秦の始皇帝、漢の武帝は不老長生を求めて盛んに祈祷をした。祭った神々は太乙(太一)・五神(五行星の神)・陳宝という神・八神(八方の神)などで、このため牛や羊を犠牲にし、穀物・絹を供え、億万の錢を費やしたが益するところはなかった。いわんや徳もそなわず体の養生もしない卑しい男が、牛や羊や豚を犠牲にし、いかがわしい神に酒肴を供え祈願しても延命などかなえられるはずがない。惑っているのものはだし、というのである。

裏をかえせば、長生は科学的な論拠のある薬を得なければならず、むやみに神祭りなどすべきではないし、あやしげな神々に頼ってはならない、素性のしっかりとした神を信じなければならない、と主張しているのである。太乙元君を信じ、崇拜するにしても、単に祈祷や祈願の対象にすべきではない。もともと人間であったが努力して道と一体になった元君の姿を尊び信じ、自分もそうなるように努力すべきなのだ。目先の利益だけを求める祈祷や神頼みは愚かであって何も意味のないことだというのである。ここに抱朴子のいう人間の真の「わざ」が示されているといえる。

#### 結論 道教信仰の特質—自然型信仰—

すでに最初に述べたように、老子や抱朴子の信仰がいわゆる道教信仰の実体を示すものではない。後漢の道士張角の始めた太平道や張陵が老子から呪法を授かったとして創始した五斗米道の方がむしろ道教の源流であるともいえる。しかしそれらに理論的根拠を与えた老子や抱朴子の原典の中に、私は道教の信仰の原点を探ってみたのである。このような制約があるが、最後に老子から抱朴子への信仰の推移の中に道教信仰の特徴を指摘したい。

まず『老子』において、どちらかというと哲学的な特色をもっていた「道」という概念が、明確に宗教的な信仰対象としての「仙道」に変化させられているが、道と、仙道といっても究極的には自然の本体を指すし、神といってもその自然の中での存在である。超越的な存在でもないし超自然的な力を信じるのでもない。最後は自然と一体になることでもある。愛情のような人為的なものではなく、自然の働きに溶け込むことこそその理想であり、無理な信仰は意味がない。いわば自然な信仰こそが肝要であった。このような信仰を私は自然型信仰ととらえてみたい。

次に、一面で科学者でもあった葛洪は熱狂的、狂信的な信仰と自分の信仰が同一視されることを非常に嫌い、冷静な信仰を説いた。しかし天神のような人格的な対象も信仰対象にするわけであるから感情的な面が否定されているわけではない。理性も重んじ、同時に感情も抱擁した。金丹を作る意志と努力も重んじた。知・情・意のいずれも否定せず、人間の自然な、無理のない努力を重んじ、自然体を肝要であるとした。この点で自然型信仰と呼ぶのがやはり妥当であると思える。

宿命論が抱朴子の信仰の特徴の一つであったが、これはすべてを支配する神とか神の摂理というものが考えられていないことでもある。宿命はいわば自然の摂理であるといえる。圧倒的に人間を支配するヤハヴェやアッラーというような神は想定されていない。宿命が定められることは自然の摂理によって生かされることである。その宿命に生き、自然のままに生きるというあり方は、やはり自然型信仰と分類するのが適当であると思える。

また老子において人間は性善的にとらえられていたが、抱朴子になると人間の墮落する姿がかなり強く指摘されるようになる。それに並行して哲学的な道が宗教的に説かれるようになり、道と一体になった人間が神として信仰、崇拜の対象となった。このような変化は人間のありのままの姿を見つめて出現した自然な変化である。その姿を反省してそうならないようにその欠陥を補うさまざまな神々が出現し、それらの神々が信じられるようになった。これは人間の自然な姿に照らして自然な神々が出現してきたのであり、その神々が自然に信仰され始めたという点で、やはり自然型信仰とするのがよいと思われる。そしてこの神々に不老長生を願うのである。この点はよく現世利益的であるとされるが、むしろ自然の道を信じ、自然な状態で生を続けようとする願いは自然な姿でもある。

こうして種々の側面から道教信仰の特徴を探てくると、他の宗教と比較し類型化するとすれば、やはり自然型信仰とでも名づけるのが最も妥当であると考えられる。

なおこの諸宗教の信仰の類型化の詳細については別の機会に論じたい。

## 注

- 1) 『老子莊子上』(新釈漢文大系 7、明治書院、1966) 107頁
- 2) 同、42頁
- 3) 同、46頁
- 4) 同、23頁
- 5) 同、37頁
- 6) 同、37頁
- 7) 同、44頁
- 8) 同、65頁
- 9) 同、77頁
- 10) 同、90頁
- 11) 同、120頁
- 12) 同、87頁
- 13) 同、87頁
- 14) 同、71頁
- 15) 同、52頁
- 16) 同、52頁
- 17) 同、19頁
- 18) 同、19頁
- 19) 『抱朴子』(中国古典新書、村上嘉実著、明德出版社、1967) 68頁
- 20) 同、109頁
- 21) 同、150頁
- 22) 同、217頁
- 23) 同、104頁
- 24) 同、155頁
- 25) 同、182頁
- 26) 同、184頁
- 27) 同、200頁
- 28) 同、57頁
- 29) 同、144頁
- 30) 同、221-222頁
- 31) 同、63頁
- 32) 同、100-101頁